
動物たちのほのぼのライフ

玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動物たちのほのぼのライフ

【Nコード】

N2875Y

【作者名】

玄武

【あらすじ】

年を取らない作品。ほのぼのとした動物達の話です。

第1話（前書き）

動物がペットを飼ったりしています。

第1話

ここは、魔力や妖力の存在する世界。その魔力や妖力をもって生まれてきた者は、普通の学園ではなくその専門の学園に通う。

そしてこの世界には、様々な島国がある。その中で一番大きい国が総合国。主に力をもたない普通の人々が暮らし、普通の学園がある。その他の国で有名なのが、火の国、水の国、植物の国、虫の国、万能の国、機械の国、死の国、地の国・通称地国じごく、歌の国があり、これらの国に住む者は、何らかのエリートである。普通の人も体にもっている者は、エリートでなくても、これらの国に住むことが許可される。

国王、もしくは社長達の上に立つ、力の強い物を元帥、元帥よりも賢い者を大元帥と呼び、このような者は本名を隠し、仮の名を名乗り、本当に信頼している者などのみに、本名を明かすようになっている。

それでは、ほのぼのライフ、スタートです。

「起きてくださーい！滝波たきなみさーん！」

フリルなどの付いていない、シンプルなエプロンをしたカンガルーが、ここ、水の国の王宮の王室でとても気持ちのいい、ふかふかのベッドで眠っているペンギンを起こそうとしている。

「滝波さーん！」

「何だようるさいな。俺の腹時計はまだ夜の三時だよ。」

「それは狂ってますよー。」

「ほら見る時計を！」

時計はキッチリ三時を指している。

「素早く滝波さんがかえたんでしょ。」

「証拠はあるのか。証拠は。」

「あります。ほらここに、証拠写真が！」

そこには、明らかに時計を外して時間を変えているペンギン、滝波が写っている。

「チツ。バレたか。」

「チツ、じゃないですよ。」

「うるさいなあ。」

「学園あるんですから。早く行きますよ。」

「学園休む。」

「ダメです。」

「いいだろ。俺は最強なんだ！」

「ほらほら、行きますよ。」

「しょーがないな。」

「ほれ、早く！」

渋々ながら、リムジンに滝波が乗ると、キュイイイインと派手な音を立てながら、タイヤが横になり、そこから空気が噴出され、総合国にある専門の学園、妖魔法学園へと飛び立った。

リムジンが妖魔法学園に降り立つとリムジンのドアが開き、中から仮面を付けた滝波が出てきた。

「じゃ、行ってくるな。」

仮面をつけているのに、くぐもっていないよく通る声で言った。

「間違えないでくださいよ。ここ妖魔法学園には、幼等部、小等部、中等部、高等部、大学部そして、学園長室、幼等部長室、小等部長室、中等部長室、高等部長室、大学部長室があつて、幼等部、小等部、中等部、高等部、大学部は、それぞれの棟に分かれていて、学園長室などは、また別の棟になっています。ここまでついてこれましたか？」

「頭が痛くなつてくる。」

「まあ、続けましょう。そしてこれらの棟は、運動場をコの字を反対にしたようなかたちで囲んでいます。」

「コ」の字だと、一つ棒がたりないぞ？」

「最後まで話を聞いてくださいよ。それで、足りない部分には、今言った棟が全てすっぽりと入るほどの森、迷いの森があります。その中心部に、天国近くまである巨大な木があります。」

「お前よく知ってたんなら。」

「情報屋から聞きました。まあ、あなたが行くのは幼等部ですよ。」

第1話（後書き）

中途半端なところで終わってますが、ご了承ください。

これの人間版もいつか書くつもりです。

次回もよければ読んでいただきたく思います。

読んでくださった皆様、有難うございました。

第2話

仮面を付けた滝波が、堂々と屋上に入ってきた。

「えーつと、ここが入園式の会場か。」

とても広い、学園長室のある学園長棟の屋上に、幼等部に入る2才の動物たちが集まっている。

クマ、ペンギン、コアラ、ヒツジ、あれは恐竜か？ステゴサウルスのピンクと赤のバージョンか。ん？あれはまさかカツパか？ピンクが2人と赤のが1人か。頭が丸くて体がその半分の大きさってところか。ちっちゃくてかわいいなあ。他にも結構いるけどまあいいか。

「まだ始まらねーの？」

そう誰かが言った時、

「じゃ、はーじめまーすよ。」

やけにハイテンションな化け猫が出てきて言った。その化け猫は、体と頭が同じ大きさで頭が猫、体が南瓜で、手足と尻尾がとも短い化け猫だ。手足が短いのでずっと足を伸ばして座っている。大きさは滝波を3人積んだほどもある。

「えー、私がこの魔法学園の学園長でーす。」

この時、その場にいた全ての者が耳を疑った。

「あ、信じてませんねー。信じてくださいよー。」

本当にこのハイテンションな化け猫が学園長だと皆が分かったところで、入園式は終了した。

「ふー、終わった終わった。面倒くさかった。」

「そこまで長くなかったでしょう。私ずっと待ってましたけど、それほどかかってなかったですよ。」

「カルガー、アイスあるか？」

「人の話を聞きなさい。あと、アイスありますよ。」

このカンガルー、名前をカルガーと言う。

「よっしゃー。アイス、アイス。」

また、リムジンが派手な音を立てて水の国へと飛び立った。

第3話

ここは、水の国の王宮。その王室で召使いのカンガル、カルガ
ーが国王である滝波たきなみを、起こしている。

「おーきーて、くーだーさーいーよーお。滝波さーん。」

眠そうに目をこすりながらペンギンの滝波が起き上がった。

「んー。なあカルガ、国王は本名でいいんだぜ？なんで滝波なん
だ？水龍でいいだろ？」

滝波の本名は、水龍と言っらしい。

「癖でそう言ってしまうんですよ。それより、学園に遅れますよ。」

「朝ご飯は？」

「そこにありますよ。」

と言って指さした先には、馬鹿でかいテーブルの上に並んだものす
ごく美味しそうな料理があった。

この世界では、スズキと言う魚がとても高級で、一匹十万円もす
る。そのスズキの刺身が沢山並べられていたのだ。

「いったただつきまーす！」

普通にむしゃむしゃとスズキの刺身を食べ終わり、満足そうな水龍
を見てカルガは、

「じゃあ、学園いきますよ。」

と言った。

学園に到着すると、少し迷ったものの幼等部の教室についた。

キンコンカンコン

と、チャイムが鳴った。と同時に、大人のペンギンが教室に入っ
てきた。

「皆さん初めまして。私がこのクラスの担任の先生です。よろしく
お願いしますね。」

いきなり、ガラツと大きな音を立てて生徒の一人が入ってきた。

「すみません！おくれましー」

最後まで言わずに、先を尖らせたチヨークをその生徒にすごいスピードで投げつけた。この世界は、殺された時だけ、生き返るようになっていく。皆は、無言でチヨークを投げつけた先生から、目が離せなかった。

第4話

遅れて来た生徒に先を尖らせたチヨークを投げつけた先生は、何事もなかったかのようになり自己紹介を始めた。

「皆さん、私は朱雀すざくと言います。それとそこに倒れているあなたも、反省したら席に付きなさい。」

そう言われ、チヨークを投げつけられた生徒は、恐る恐る席に着いた。

「あ、言い忘れたことがあるんですが、遅刻、授業中のおしゃべり、悪口は許しませんからね。」

この台詞せしごを聞き、今まさにしゃべろうとしていた生徒全員が固まった。

厳しすぎるだろ先生。

このクラスの生徒全員が、そう思ったにちがいがなかった。

キンコンカンコン

「中休みは二十分間までですよ。それ以上は許しません。それと、この学校では誰かを殺すと賞金がもらえます。殺された場合のみ、生き返るのは知っていますよね？」

先生の話が終わると、皆はほとんどが小等部棟に向かった。なぜなら、幼等部の生徒は賞金が高くないだろうと思いい、賞金もそこそこありそうに倒せそうな小等部に目を付けたのだ。

一方水龍はと言うと、売店で出来立てのパンとプリンを食べていた。「ん〜ん、やっぱりプリンは美味いなあ。」

と、賞金には興味なしの様子の水龍だった。

パンとプリンを食べ終えて満足そうな水龍は、運動場の端にある川で、溺れているカツパを見つけた。

「いや、カツパなら泳げよ。」

ついつい突っ込んでしまったが、よく見ると3人いるなあ。あ、入園式で見た可愛いカツパ達だ。にしても見事なきのこ型体型：頭で

つかちだな。まあ、だから可愛いんだが。

「助けてっば〜。」

「助けてくれ〜。」

3人の中の2人はそっくりだから双子だろうと思われ、もう1人は同じ体型で赤く、怒っているように見える…:というか怒っている。

「まあ、助けるか。」

水龍は、勢い良く川に飛び込んだ。

思ったより深いな。こりゃ、溺れるかもな。

「助けてっば〜!」

「ギュー…。」

赤い方は言葉すら発していない。

「今助けっからな〜。」

言ったとおり、水龍はすぐに3人を助けてやった。

「ありがとっば〜。」

「助かったっば〜。」

「助かった。ありがと〜。」

ピンクのカツパの方は「〜っば。」などどつくよつだ。

「名前はなんて言うんだ?」

水龍が聞いた。

「桃姫っば。」

「おこりっばだ。」

「ももっばだっば。」

桃姫が言った。

「桃姫たち姉弟は、上から、ももかつばお姉ちゃん、桃姫、おこりっば、ももっばの順っば。だから、桃姫とももっばは、双子じゃないんだっばよ。」

「へえ〜。」

第4話（後書き）

また中途半端なところでおわってますが、つぎも読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875y/>

動物たちのほのぼのライフ

2011年12月5日23時48分発行